

<p>10月 23日 (日)</p> <p>レビ記 1章</p>	<p>「牛を焼き尽くす献げ物とする場合には、無傷の雄をささげる」(3節)。「焼き尽くす献げ物」の動物は「無傷」であることが求められた。それは自分の家畜の中で「最上のもの」を神に差し出すことを意味する。なんといい厳しさ、チャレンジであろうか。痛みを覚えない献金は献げ物とは言えない。痛みを覚えつつ祈りを込めて神に差し出す献げ物をしていきたい。</p>
<p>24日 (月)</p> <p>レビ記 2章</p>	<p>「穀物の献げ物にはすべて塩をかける。あなたの神との契約の塩を献げ物から絶やすな。献げ物にはすべて塩をかけてささげよ」(13節)。古代の人々にとって「塩」は生きる上で「無くてならない貴重品」であり、「聖なるもの」にふさわしい献げ物であった。私たちが神に献げ物をする時、どれだけ「無くてならないもの」としての祈りを込めているだろうか。</p>
<p>25日 (火)</p> <p>レビ記 3章</p>	<p>「これが燃やして主にささげる宥(なだ)めの香りである」(5節)。「焼き尽くす献げ物」も「穀物の献げ物」も「和解の献げ物」も、「宥めの香り」(香ばしいかおり:口語訳)である点が共通している。黙示録は「屠られた小羊」(イエス・キリスト)に対する祈りと賛美が「香り」としてささげられる礼拝を描く。私たちはどのような祈りと賛美を込めて礼拝をささげているだろうか。</p>
<p>26日 (水)</p> <p>レビ記 4章</p>	<p>「油注がれた祭司が罪を犯したために、責めが民に及んだ場合には…無傷の若い雄牛…の頭に手を置き、主の御前で牛を屠る」(3-4節)。犠牲の牛の頭に手を置くのは、自分たちの罪を代わりに背負ってもらうための祈り。自分たちは罪を背負いきれない自覚が旧約の礼拝の礎であった。私たちはどれだけの重さで自分の罪を自覚できているだろうか。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.10.23-10.30

<p>27日 (木)</p> <p>レビ記 5章</p>	<p>「だれかが罪を犯すなら、すなわち、見たり、聞いたりした事実を証言しうるのに、呪いの声を聞きながらも、なおそれを告げずにいる者は、罰を負う」(1節)。「贖罪の献げ物」の規程を読むと、どんな「小さな罪」も見逃されることのない厳しさがひしひしと伝わってくる。今日、目で見、耳で聞いたことに対して誠実であることができるように。主の助けを祈り求めて。</p>
<p>28日 (金)</p> <p>レビ記 6章</p>	<p>「焼き尽くす献げ物は祭壇の炉の上に夜通し、朝までであるようにし、祭壇の火を燃やし続ける」(2節)。「夜通し」祭壇に仕える祭司の働き。それは昼は雲の柱、夜は火の柱をもって、「まどろむことなく、眠ることなく」(詩編 121:4)イスラエルの民を守り導き続ける主の慈しみを想起する働きであった。この主がどんな時も私たちの祈りを聴いてくださることを覚えたい。</p>
<p>29日 (土)</p> <p>レビ記 7章</p>	<p>「主はこの日、…イスラエルの人々に以上の献げ物を主にささげよと命じられたのである」(38節)。「焼き尽くす」「穀物」「贖罪」「賠償」「任職」「和解」など、主が命じられた献げ物に求められたのは、すべて主が命じられたとおりに行うことであった。現代の私たちは、主の前に自らの自由や判断を大きくしすぎていないか。主の前に「小さくなる」ことを学びたい。</p>
<p>30日 (日)</p> <p>レビ記 8章</p>	<p>「今日執り行ったことは、あなたたちのために罪を贖う儀式を執行せよという主の御命令によるのである」(34節)。肉なる人として最初の、主の大祭司。その装束も聖別も儀式も、大祭司自身の罪を赦していただくため。赦された罪人として主の御前に立ち、同じ肉なる人々の罪を赦していただけるように祈り願う役目を、これから果たしていく。</p>